ISSN 0916－2461

民俗文化

第30号　近畿大学民俗学研究所
2018-10

①地主神社
（大津市葛川坊村町、2016 年 7 月、鈴木撮影）

②蓮華会
（大津市葛川坊村町、2016 年 7 月、鈴木撮影）
葛川明王院では７月（旧暦６月）に参籠修行として蓮華会（夏安居）が行われている。

③明王院本堂内
（大津市葛川坊村町、2016 年 7 月、鈴木撮影）
太鼓廻し前の静寂。

④地主神社の氏子
（大津市葛川坊村町、2016 年 7 月、鈴木撮影）
地主神社の氏子が高張提灯を掲げて、伊勢音頭を唱いながらゆっくりと地主神社に向かう。太鼓廻しで太鼓を廻す氏子が地主神社で安全祈願をする。

⑤明王院本堂で行者を待つ氏子
（大津市葛川坊村町、2016 年 7 月、鈴木撮影）
地主神社の氏子がささら竹をもって行者を待つ。ささら竹は滝の音を表現しているといわれる。

⑥太鼓廻し
（大津市葛川坊村町、2016 年 7 月、鈴木撮影）
地主神社の氏子が太鼓を廻す。

⑦太鼓廻し
（大津市葛川坊村町、2016 年 7 月、鈴木撮影）
行者は太鼓の上に乗り、経を唱えたあと前方に飛び降りる。

⑧堅田の町並み
（大津市本堅田、2018 年 1 月、藤井撮影）
写真の奥には、堅田の総鎮守といわれる伊豆神社が見える。

⑨堅田漁港
（大津市本堅田、2018 年 1 月、藤井撮影）
琵琶湖の最も狭い部分の西側に位置する。11 世紀後半に下鴨神社の御厨になり、コイやフナなどを下鴨神社に納めるようになった。まもなく、堅田には延暦寺の支配も及ぶようになる。その後、堅田は琵琶湖全体に渡る自由通行や漁業の優先権を主張し、菅浦などと漁業権をめぐって争うことになった。なお、堅田からは現在でも葵祭の際に下鴨神社へフナやフナ寿司を献上している。

⑩浮見堂
（大津市本堅田、2018 年 1 月、藤井撮影）
臨済宗の満月寺。平安時代、比叡山横川の源信が山上より琵琶湖をながめ、湖中に一宇を建立し、自ら一千体の阿弥陀仏を刻んで湖上交通の安全と衆生済度を発願したことに始まる。風光明媚なことから、近江八景「堅田の落雁」として知られるようになった。現在の浮見堂は昭和 12 年に再建されたもの。

⑪比叡山延暦寺根本中堂
（大津市坂本本町、1994 年 3 月、藤井撮影）
天台宗総本山延暦寺の総本堂。宗祖の最澄が延暦 7 年（788）に一乗止観院として創建し、自ら刻んだ薬師如来を本尊とした。比叡山は山上のなかでも東塔・西塔・横川に分かれて堂塔が点在する。根本中堂は東塔の中心。

⑫山王祭　神輿上げ
（大津市坂本、1999 年 3 月 7 日、藤井撮影）
3 月 1 日におこなわれていたが、現在では 3 月の第 1 日曜日におこなわれている。標高 378m の八王子山頂に鎮座する牛尾・三宮の両社に二社の神輿を担ぎ上げる。この日から日吉大社の山王祭が始まる。牛尾が男神、三宮が女神で、4 月 12 日の「しりつなぎ神事」まで、山上でお見合いをするという。

⑬山王祭　午の神事の松明
（大津市坂本、1999 年 4 月 12 日、藤井撮影）
4 月 12 日の夜、八王子山上から、3 月に担ぎ上げた牛尾・三宮の神輿を下ろす午の神事がおこなわれる。坂本地区の人々が神輿を担ぐ。神輿を迎えるための松明が焚かれる。

⑭山王祭　午の神事
（大津市坂本、1999 年 4 月 12 日、藤井撮影）
午後 8 時ごろから、牛尾、続いて三宮の神輿が、坂本の駕輿丁に担がれて山を下りる。

⑮山王祭　しりつなぎの神事
（大津市坂本、1999 年 4 月 12 日、藤井撮影）
神輿は東本宮の拝殿に安置され、しりつなぎの神事がおこなわれる。拝殿に安置された二社の神輿は、後部の黒棒を合わせる形で置かれる。神の結婚をあらわしているという。宮司から「御生れ」の祝詞が奏上される。

⑯山王祭　神輿出し
（大津市坂本、1999 年 4 月 13 日、藤井撮影）
4 月 13 日の朝、西本宮では西本宮・宇佐宮・白山宮の神輿が拝殿に出される。東本宮では、前夜に置かれた牛尾・三宮以外の樹下宮・東本宮（二宮）の神輿が出される。その後、東本宮の四社の神輿が宵宮場（大政所）へと移動する。神酒・菓子・ワカメ・干し柿・干し魚・洗米・鏡・人形一対・鳥形・椿造花・筆 2 本などである。

⑰山王祭　献茶祭
（大津市坂本、1999 年 4 月 13 日、藤井撮影）
　4 月 13 日の昼前、宵宮場の前に仮設された小屋で茶がたてられる。日吉大社境内の走井で汲んだ水で、坂本の茶園の茶をたてる。茶は宵宮場に置かれた四社の神輿に供えられる。

⑱山王祭　花渡り
（大津市坂本、1999 年 4 月 13 日、藤井撮影）
　13 日の午後 1 時ごろから、日吉馬場で花渡りがおこなわれる。坂本各地区から出されたハナや、個人で出したハナが並ぶ。花渡りは、この夜に誕生する若宮への献花の意味が込められているという。

⑲山王祭　未御供
（大津市坂本、1999 年 4 月 13 日、藤井撮影）
　13 日の午後 3 時ごろ、京都室町仏光寺の山王町の人々により、宵宮場の神輿に御供が供えられる。未御供と呼ばれる。御供の入った唐櫃の蓋には「慶応元丑年四月吉祥日　京都室町通仏光寺南エ入山王町所持」と書かれている。午後 4 時ごろには、西本宮へ供えられる。

⑳八乙女の献納
（大津市坂本、1999 年 4 月 13 日、藤井撮影）
　未御供のあと、西本宮では下阪本の八乙女による御供の献納がおこなわれる。

㉑山王祭　神輿落とし
（大津市坂本、1999 年 4 月 13 日、藤井撮影）
13 日午後 7 時より宵宮場で神輿落としがおこなわれる。駕輿丁の若者が宵宮場の神輿を上下に激しくゆする。若宮誕生の陣痛をあらわしているという。その後、東本宮の四社の神輿は、西本宮へと向かう。西本宮の拝殿にはこの日の朝に出された三社の神輿が置かれている。そこに、東本宮の四社の神輿を置く。合計七社の神輿はここで一夜を過ごす。

㉒山王祭　例祭
（大津市坂本、1999 年 4 月 14 日、藤井撮影）
14 日午前 8 時過ぎ、東本宮で例祭がおこなわれたのち、西本宮で例祭がおこなわれる。宮司による祝詞奏上ののち、天台座主により五色の幣が献納され、般若心経が唱えられる。

㉓山王祭　桂のお供え
（大津市坂本、1999 年 4 月 14 日、藤井撮影）
山王祭は「桂の祭」とも呼ばれる。桂の枝は例祭の際に、神前に供えられる。

㉔山王祭　桂の配布
（大津市坂本、1999 年 4 月 14 日、藤井撮影）
例祭の際、西本宮拝殿に並べられた神輿に供えられたあと、参列者にも一枝ずつ配られる。

㉕山王祭　大榊の還御
（大津市坂本、1999 年 4 月 14 日、藤井撮影）
4 月 3 日に天孫神社に移されていた大榊が西本宮へ還御する。大榊は行列を組んで参道を進む。二の鳥居にひかえていた「下の材」が行列を先導し、三の鳥居にひかえていた「上の材」と行列を先導した「下の材」の先端を打ち合わせる。

㉖山王祭　神輿出し
（大津市坂本、1999 年 4 月 14 日、藤井撮影）
大榊が西本宮へ入ると、役員が扇を振り上げ、拝殿に並べられていた七社の神輿が出御する。扇を振りかざす甲冑武者を先頭にして、七社の神輿は山王鳥居をくぐって参道を下る。七社の神輿は現在では途中からトラックに乗せられ、下阪本の七本柳の浜まで運ばれ、そこから船に乗る。

㉗山王祭　粟津御供
（大津市唐崎、1999 年 4 月 14 日、藤井撮影）
大津への遷都の際、膳所の漁師が唐崎沖で、大和から日吉社に向かう三輪明神に粟飯を献上したという故事にちなみ、七社の神輿を乗せた船に対して、粟津御供が献じられる。粟飯（白飯を方形にして表面に粟飯を載せる）・ぶとまがり（米粉団子を使い、細長にして曲げた形状にした菓子）・塩鯛・ミョウガ・ワカメ・山芋・榧の実・みかん・栗・干し柿・たけのこなどである。現在、膳所の五社が毎年順番で御供を準備する。

㉘山王祭　粟津御供
（大津市唐崎、1999 年 4 月 14 日、藤井撮影）
午後 3 時ごろ、神輿を乗せた船が沖合に見えてくると、唐崎神社北側の浜より、日吉大社の宮司を乗せ、7 膳分の御供を載せて御供船が出る。沖合で神輿船に着船し、御供船より神輿船に大きな御幣が供えられる。神輿船の甲冑武者が御幣を受け取り、宮司が神輿船に乗り移る。粟津御供は湖上に流される。午後 5 時ごろ、神輿は比叡辻の浜に着き、西本宮へと還御する。

㉙唐崎
（大津市唐崎、1998 年 12 月、藤井撮影）
平安時代には、天皇の災厄を祓う七瀬の祓所のひとつとして重視された。『枕草子』には湖畔の名勝として紹介され、室町時代に「近江八景」に選ばれてからは「唐崎夜雨」の舞台として知られるようになった。日吉大社の鎮座とも深いかかわりがあるため、粟津御供は唐崎から船が出る。

㉚山王祭　酉の神事
（大津市坂本、1999 年 4 月 15 日、藤井撮影）
15 日午前 10 時ごろ、神官たちは、山王祭が終了したことを日吉各社におこなう。これを酉の神事という。神官たちは桂の若芽を冠に挿す。

㉛大津祭り
（大津市、1994 年 10 月、渡辺撮影）
大津町人の祭りとして発展。現在、13 基の曳山が巡行する。カラクリは日本最古のものといわれ、巡行中、「所望」の声がかかると、山車独特の巧妙なカラクリを扱露する。祭り囃子を奏でながら街を練る。

㉜三井寺の観音堂
（大津市園城寺町、2018 年 1 月、藤井撮影）
園城寺は天台寺門宗の総本山。境内に霊泉があることから、通称、三井寺と呼ばれる。境内の高台にある観音堂は西国三十三所観音霊場の 14 番札所。

㉝石山寺
（大津市石山寺、2016 年 11 月、藤井撮影）
琵琶湖から流れ出る瀬田川の西岸に位置する。境内には硅灰石が多く、その上に堂塔が建てられている。奈良時代、東大寺の良弁が建立し、平安時代には真言宗の寺院となる。平安時代には、京都の貴族たちにより石山詣が盛んにおこなわれた。西国三十三所観音霊場の 13 番札所。

㉞岩間山正法寺
（大津市石山内畑町、2016 年 11 月、藤井撮影）
大津市と宇治市の境の山中にある。岩間山正法寺、通称、岩間寺という。泰澄は桂の木で千手観音を刻んだといい、現在でも境内および周辺には桂の木が多く自生する。また、泰澄がこの地に伽藍を建立する際、雷を封じ込めたといい、雷除け観音といわれている。西国三十三所観音霊場の 12 番札所。11 番札所の醍醐寺（上醍醐）から山道を進むと岩間寺に至る。

㉟建部大社
（大津市神領、2006 年 11 月、藤井撮影）
日本武尊（ヤマトタケルノミコト）を祀る。近江国府に近く、近江国一宮とされてきた。

㊱勝部の火祭り
（守山市、1 月 8 日、渡辺撮影）
物部氏創建の古社で松明 16 基が作られ、その燃える火に当たり、一年の無病息災を祈る。若者が中心になっておこなう。

㊲すしきり祭り
（守山市幸津川町、1994 年 5 月、渡辺撮影）
神饌の鮒鮨を神前で袴姿の若者が箸を左手に包丁を右手に作法に従って料理し、神前に供える。

㊳油日祭り
（甲賀市甲賀町油日、1974 年 5 月、渡辺撮影）
平安中期に始まったが、今は奴振りと、伝統の踊りで知られる。御祭神は油日大神で、油の神として、崇敬を集めている。

㊴望月家
（甲賀市甲南町竜法師、2015 年 2 月、藤井撮影）
中世、修験道場として栄えた飯道山の東麓には山伏村が生まれた。そのうち、竜法師は伊勢国朝熊山の信仰を広める山伏たちの本拠で、彼らは「朝熊の万金丹」を持って全国を巡った。甲賀忍者とは薬を売り歩く山伏たちの一面を表しているといわれる。近年、「忍術屋敷」として知られる望月家も、朝熊坊のひとつであった。なお、旧甲賀郡には近代以降も製薬会社が多く存在する。

㊵若宮神社の勧請縄
（甲賀市土山町大河原、2015 年 2 月、藤井撮影）

㊶日牟禮八幡宮
（近江八幡市宮内町、2006 年 11 月、藤井撮影）
八幡山の麓に鎮座する。近江八幡の総社。

㊷左義長祭り
（近江八幡市、1998 年 3 月、渡辺撮影）
日牟禮八幡宮の祭礼。織田信長の死後、安土から移住してきた人々が始めたといわれる。近年の左義長祭りには、旧城下町の各町から左義長 13 基が奉納される。左義長の中心に据えられた山車には、その年の干支にちなんだものを、黒豆・小豆・胡麻・昆布・するめ・カツオ節などの食材を使って作る。

㊸松明祭
（近江八幡市、1972 年 4 月、渡辺撮影）
日牟禮八幡宮の祭礼。4 月 14 日にはヨシなどで作った松明で奉火、15 日には大太鼓が宮入りする。八幡宮境内で、一斉に奉火、盛大におこなわれる火祭りには、太鼓を乱打するので、太鼓祭りとも呼ばれる。

㊹八幡堀
（近江八幡市宮内町、2006 年 11 月、藤井撮影）
天正 13 年（1585）、豊臣秀次により八幡山城の麓に城下町が形成された。八幡堀沿いの町は廃城後も在郷町として発展し、八幡堀は川船が行き来した。

㊺水郷
（近江八幡市、2009 年 5 月、藤井撮影）
近江八幡市街地の北東に広がる西の湖にはヨシ原が広がり、ヨシ産業が盛んであった。現在は水郷巡りの観光船も出ている。平成 8 年（1996）、「近江八幡の水郷」が重要文化的景観に選定された。重要文化的景観としては全国で最初の選定であった。

㊻長命寺
（近江八幡市長命寺町、2009 年 5 月、藤井撮影）
武内宿祢がこの山の柳の木に「寿命長遠諸願成就」と刻み、長生きしたという。その後、聖徳太子がその柳の木で観音像を刻み、それが本尊となっている。武内宿祢は長命寺の護法神として祀られている。また、鐘楼は琵琶湖の龍神が観音に捧げたという伝説がある。西国三十三所観音霊場の 31 番札所。江戸時代の巡礼は竹生島から船で長命寺へと渡った。

㊼観音正寺
（近江八幡市安土町石寺、2007 年 6 月、藤井撮影）
安土城跡の東南に位置する繖山中腹にある。創建時は現在地よりも上にあったというが、六角氏の観音寺城が置かれたころには、山麓に移されていた。慶長 2 年（1597）に現在地に再建された。西国三十三所観音霊場の 32 番札所。西国札所のなかでも難所のひとつであったが、現在は寺の近くまで自動車道路ができている。

㊽観音正寺境内
（近江八幡市安土町石寺、2017 年 11 月、網撮影）
観音正寺には、聖徳太子が漁師の生まれ変わりである人魚の願いによって寺院を建立したとする伝承がある。近年まで人魚のミイラが伝えられていたが、平成 5 年に火災で惜しくも焼失してしまった。

㊾老蘇森奥石神社
(近江八幡市安土町東老蘇、2017 年 11 月、網撮影)
　老蘇森は平安時代より和歌に詠われた名所で、森の中には延喜式内社である奥石神社が祀られている。奥石神社本殿は織田信長によって再建された三間社流造の建築で国の重要文化財に、老蘇森は国指定史跡に指定されている。

㊿奥石神社の神紋
(近江八幡市安土町東老蘇、2007 年 6 月、藤井撮影)
　伝説によると、この地は地が裂け、水が湧いて、人が住むことができる場所ではなかったが、石部大連がマツ・スギ・ヒノキなどの苗木を植えたところ、たちまち大森林になったという。大連は百数十歳まで生きたため、老蘇の森と呼ばれるようになったという。

51中山道と老蘇轟地蔵跡
(近江八幡市安土町東老蘇、2017 年 11 月、網撮影)
　中山道の轟川にかかる橋のたもとに千体地蔵をまつる地蔵堂が建てられていたが、明治になって福生寺境内に移されたという。

52老蘇福生寺に残る轟地蔵堂
(近江八幡市安土町東老蘇、2017 年 11 月、網撮影)

㊸福生寺轟地蔵尊
（近江八幡市安土町東老蘇、2017 年 11 月、網撮影）
福生寺境内に移された轟地蔵堂の千体地蔵。古いものは江戸時代に遡る土人形で、小幡人形とも伝える。

㊹旧宮地家住宅
（近江八幡市安土町下豊浦、2007 年 6 月、藤井撮影）
近江風土記の丘・安土城考古博物館の敷地に移築されている。長浜市国友町にあった家屋で湖北地方の民家の典型的な例。入母屋づくり、茅葺きの建物で、屋根裏はツシと呼ばれる物置が設置されている。

㊺日野祭
（日野町、1978 年 5 月、渡辺撮影）
日野町にある馬見岡綿向神社の春の大祭である。豪華に飾られた 16 基の曳山、3 基の神輿が祭りの中心となり巡行する。

㊻ほいのぼり
（日野町、1974 年 4 月、渡辺撮影）
高さ 10m 程の幟をかかげる春祭り、祭りの伝統は古く楽市楽座の商工業と共に、祭りがおこなわれてきたといわれる。

㊼伊庭の坂下し祭り
（東近江市、1973 年 5 月、渡辺撮影）
　3 基の神輿を岩だらけの崖から下す祭りで豊かな経験と頑丈な肉体が必要。難所を緊張しながらゆっくり下ろす。そのとき少年 2 人が神輿に乗る。

㊽山の神祭り
（東近江市永源寺、1978 年 1 月 2 日、渡辺撮影）
　桜の木が女神で、松の木が男神である。祭りを新年の「はやしぞめ」という。重要な神事である。

㊾五個荘金堂地区の街並み
（東近江市五個荘金堂町、2017 年 11 月、網撮影）
　近江商人の屋敷と農家集落が一体となった街並みが現在まで残っており、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。

㊿弘誓寺本堂
（東近江市五個荘金堂町、2017 年 11 月、網撮影）
　近江商人たちの信仰を集めた真宗大谷派の寺院である。本堂は宝暦 14 年（1764）に完成した大堂で、近江商人たちから多くの寄進を受けて造営されたという。

㊶中山道と「小幡人形窯元」
（東近江市五個荘小幡町、2017 年 11 月、網撮影）
小幡は中山道と伊勢と多賀を結ぶ御代参街道の分岐点であり、多くの人々が街道を行き交っていた。小幡人形は賑やかな街道沿いで作られており、往来の人々の目には可愛い「伏見人形」として映ったことであろう。

㊷「小幡人形窯元」九代目の細居源悟氏
（東近江市五個荘小幡町、2017 年 11 月、網撮影）
平成に入って小幡人形の伝統を継承した細井源吾氏。継承した当初は勤務のかたわらに、人形作りを一から学び練習したという。伝統工芸品の継承につとめた長年の功績が認められ、平成 29 年 11 月 3 日には東近江市より表彰状が授与された。

㊸小幡人形「馬乗り天神」
（東近江市五個荘小幡町、2017 年 11 月、網撮影）
多賀大社の古例大祭で行装する馬頭人と御使殿をモデルに製作された天神さん。平成 25 年に開催された第 55 回日本民芸公募展で、オリジナリティの高さから優秀賞を受賞した。

㊹小幡人形「鼠乗り俵牛」
（東近江市五個荘小幡町、2017 年 11 月、網撮影）
五穀豊穣を祈る伝統的な土人形である俵牛をモチーフに、干支の丑の前に子（鼠）が躍り出る姿をユニークに表現した創作人形。木幡人形に特有の鮮やかな色彩が心地よい。

⑥⑤小幡人形「お福・福助の憩い」原型
（東近江市五個荘小幡町、2018 年 5 月、網撮影）
「小幡人形窯元」には多くの原型と土型が残されている。細居源悟氏は注文品だけではなく、時折それらの中から面白いものを選んで人形を製作し、小幡人形の奥深さを伝えようとされている。

⑥⑥小幡人形「三代虎」原型
（東近江市五個荘小幡町、2018 年 5 月、網撮影）

⑥⑦幡人形「お福・福助の憩い」
（東近江市五個荘小幡町、2018 年 5 月、網撮影）
夫婦とされる福助とお福の仲睦まじい姿を表現した人形で、二人の表情を眺めていると自然と心が温まる。

⑥⑧小幡人形「三代虎」
（東近江市五個荘小幡町、2018 年 5 月、網撮影）
製作された人形をみると、原型の彫りにうかがえる虎の厳しさが緩和しており、土人形が子供たちの成長祈願の玩具であることを、可愛い虎たちの姿から再認識できる。

㊾小幡人形「桃持ち猿」二体
（東近江市五個荘竜田町、2017 年 11 月、網撮影）
九代目源悟氏の桃持ち猿（左）と、八代目文造氏の桃持ち猿（右）。源悟氏の人形は独自の工夫としてラメを使用しており、色彩に華やかさが増している。源悟氏の桃持ち猿は平成 4 年の年賀切手の図案に採用され、全国的に注目されるようになった。

㊿小幡人形「福助」
（東近江市五個荘竜田町、2017 年 11 月、網撮影）
福助は裃姿で表現されるのが一般的だが、五個荘が近江商人の故郷であることから、小幡人形では羽織袴姿で製作されることが多い。

(71)小幡人形「鍋冠人形」
（東近江市五個荘竜田町、2017 年 11 月、網撮影）
筑摩神社の祭礼である鍋冠祭りの乙女人形で、朝妻筑摩の木彫作家である真野正三氏が原像を作成したという。「伏見人形」として製作されていた小幡人形であるが、七代源助以来、郷土人形として近江に関わる創作人形も多く製作している。

(72)小幡人形「観音正寺人魚」
（東近江市五個荘竜田町、2017 年 11 月、網撮影）
郷土の創作人形の一種。人魚伝承が残る観音正寺から依頼を受けて製作された人形である。

⑬西照寺山門
（東近江市五個荘五位田町、2017 年 11 月、網撮影）
西照寺は浄土宗の寺院で、境内に千体地蔵を安置する地蔵堂が建てられている。

⑭西照寺千体地蔵
（東近江市五個荘五位田町、2017 年 11 月、網撮影）
地蔵堂は明和元年（1764）の建立で、天保 11 年（1840）に改築されたという。堂内には千体地蔵として 200 体あまりの土人形が残されており、古いもので天保の墨書をもつ地蔵がある。

⑮江戸時代後期の千体地蔵尊
（東近江市五個荘五位田町、2017 年 11 月、網撮影）
江戸時代後期に遡る地蔵尊で、背面に供養された子供の戒名が記されている。同時期に製作されたと考えられる小地蔵には、天保 3 年（1832）や嘉永 7 年（1854）の墨書が認められる。

⑯八代目細居文造氏が奉納した千体地蔵尊
（東近江市五個荘五位田町、2017 年 11 月、網撮影）
底部の墨書から、昭和 62 年に「小幡人形窯元」八代目の細居文造氏が製作し奉納した五体地蔵であることがわかる。文造は同時に小地蔵五体も奉納している。

⑦⑦勝堂の千体地蔵堂
（東近江市勝堂町、2017 年 11 月、網撮影）
明治の初めに建てられた字の地蔵堂。現在も女性だけの地蔵講によって守られている。

⑦⑧勝堂千体地蔵
（東近江市勝堂町、2017 年 11 月、網撮影）
中央に地蔵石像が安置され、その周りに土人形の千体地蔵がところ狭しと祀られている。大正年間には現在の地蔵堂を建てるため五個荘まで寄進を募って歩いたとのことで、大正 13 年に七代目細居源助が奉納した地蔵尊が残されている。

⑦⑨木地師の里
（東近江市蛭谷町、1995 年 7 月、藤井撮影）
貞観元年（859）、惟喬親王は小椋谷にたどり着き、この地で 19 年間過ごしたという。全国の木地師は小椋谷を祖先の地として、惟喬親王を信仰してきた。小椋谷のうち、君ヶ畑には惟喬親王を祀る高松御所金龍寺と、大皇器地祖神社があり、蛭谷町には、筒井公文所と惟喬親王の御陵、木地師資料館などがある。

⑧⓪西明寺
（甲良町池寺、1995 年 7 月、藤井撮影）
金剛輪寺・百済寺とともに湖東三山として知られる。

㊶金剛輪寺本堂
（愛荘町松尾寺、2017 年 11 月、網撮影）
聖武天皇の勅願寺として行基が開山したと伝える湖東の古刹である。本堂は鎌倉時代に建立された和様建築として知られ、現在国宝に指定されている。

㊷金剛輪寺参道の千体地蔵
（愛荘町松尾寺、2017 年 11 月、網撮影）
昭和 53 年に完工した三重塔の復元大修理を契機に、住職が千体地蔵を募り供養したという。寺山麓の黒門から二天門まで続く参道沿いには、数多くの石地蔵がたたずみ幽玄な空間を作り出している。

㊸多賀大社の社殿
（犬上郡多賀町多賀、2017 年 11 月、網撮影）
湖東地域を代表する古社で、近世には「お多賀さん」と親しまれ全国的から信者を集めるようになった。「馬まつり」とも呼ばれる 4 月の古例大祭では、祭礼当日に馬上束帯姿の馬頭人と御使殿を中心として、行装をただした騎馬や御神輿などのお渡りが執り行われる。

㊹多賀祭り
（多賀町多賀、1973 年 4 月、渡辺撮影）
湖国随一の宮。祭事は多彩であり豪壮である。行列を指揮する馬頭人、馬に乗る神官、若武者の勇姿、大勢の奉仕人、神輿、鳳輦を担ぐ人、絢爛な行列絵巻が練る。

⑧⑤御田植祭
（多賀町多賀、1974 年 6 月、渡辺撮影）
豊作を祈る神事。早乙女が田植歌に合わせて古式ゆかしく神田で稲を植える。

⑧⑥玄宮園と彦根城天守
（彦根市金亀町、2006 年 2 月、藤井撮影）
玄宮園は彦根城内の北東部に 4 代藩主・井伊直興により延宝 5 年（1677）に造営された。近江八景を模して造られた大名庭園。

⑧⑦中山道柏原宿
（米原市柏原、2017 年 11 月、網撮影）
中山道の古い宿場町の面影を残す柏原宿。往時には名物のもぐさ屋が 10 軒ほど軒を並べたという。

⑧⑧柏原宿の艾屋「亀屋左京」
（米原市柏原、2017 年 11 月、網撮影）
伊吹もぐさを商う「亀屋」。福助人形の由来譚の一つとして、「亀屋」の番頭福助の話が伝わっており、店先には今でも巨大な福助が置かれている。

⑧⑨伊吹山山頂
（米原市上野、2011 年 9 月、藤井撮影）
標高 1377m の伊吹山は滋賀県の最高峰。岐阜県との境界となっているが、山頂は滋賀県になる。ヤマトタケルノミコトの伝説にも登場する。山岳信仰の対象であり、山頂には弥勒堂などが点在している。また、伊吹山には約 1300 種の植物が自生し、そのうち 300 種近くが薬草である。山麓の人々は伊吹山の薬草を利用してきた。現在では山頂付近の花畑は、国の天然記念物となっている。

⑨⓪柏原宿からみた伊吹山
（米原市柏原、2017 年 11 月、網撮影）
神が宿る霊山の伊吹山は、古くより薬草の宝庫としても知られていた。とくに伊吹もぐさは、江戸吉原で「江州柏原　伊吹山のふもと　亀屋左京のきりもぐさ」と歌われ、全国的に有名になった。

⑨①筑摩神社拝殿
（米原市朝妻筑摩、2018 年 5 月、網撮影）
古来より湖上交通の重要な港であった朝妻湊の南、内湖の筑摩江と琵琶湖を区切る砂州上に鎮座する古社である。周辺一帯には宮内省内膳司の料所である筑摩御厨が置かれ、都との関係も深い地域であった。

⑨②筑摩神社の鍋冠祭り
（米原市朝妻筑摩、2018 年 5 月、網撮影）
毎年 5 月 3 日に行われる筑摩神社の祭礼で、地元では日本三大奇祭の一つとも称されている。古くは氏子の女性が付き合った男性の数だけ鍋釜をかぶって神輿に従うことを慣例したが、江戸時代に改められ現在では可愛い童女が狩衣姿で参列している。

㉝長浜八幡宮
（長浜市宮前町、2007 年 1 月、藤井撮影）
平安時代に創建されたが、兵火などで荒廃していた。羽柴秀吉が長浜城主になると再興された。春季大祭は曳山祭として知られている。

㉞長浜の町
（長浜市、2007 年 1 月、藤井撮影）

㉟長浜曳山祭
（長浜市、1992 年 4 月、渡辺撮影）
湖北に春を告げる湖国三大祭りの一つ。豊臣秀吉に男子が生まれた時、祝金で 12 基の曳山を作って祝ったのが始まりとされる。曳山では、子供歌舞伎が演じられる。国重要無形民俗文化財である。

㊱フナズシ
（長浜市南浜町、2008 年 8 月、藤井撮影）
琵琶湖で漁獲したフナを米とともに漬けて発酵させた保存食。フナは 5・6 月ごろ塩切りして、7 月に飯につけ、秋から冬にかけて食べた。

⑨⑦姉川
（2005 年 8 月、藤井撮影）

⑨⑧田植え
（長浜市新居町、2006 年 5 月、藤井撮影）

⑨⑨茅葺の民家
（長浜市早崎町、2008 年 8 月、藤井撮影）
昭和 30 年代に干拓されるまで、早崎内湖にはヨシが多かった。そのヨシは早崎地区にとって大きな収入源となっていた。ヨシは屋根の材料として使われた。

⑩⓪イケ
（長浜市早崎町、2007 年 1 月、藤井撮影）
井戸とは別に水をためているところをイケと呼ぶ。一番上流にあたる場所が飲み水、二番目が皿洗い、最後が土のついた野菜や足など、という順番で洗っていた。

⑩①早崎の集落
（長浜市早崎町、2008 年 8 月、藤井撮影）
竹生島とかかわりが深い地区。内湖に面した集落であった。

⑩②オコナイ
（長浜市木之本町杉野、1977 年 2 月、渡辺撮影）
オコナイは湖北伊香郡各地でおこなわれる春迎えの神事。餅をついて頭屋が鏡餅を氏神に供え豊作を祈る。

⑩③野神
（長浜市高月町高野、2005 年 8 月、藤井撮影）
野神は村の入り口などに巨木を祀っている場合が多い。湖北の高月町には野神が点在している。高野では集落と水田の境界に野神がある。樹種はスギである。8 月 17 日ごろの日曜日に野神祭をおこなっている。

⑩④たんざく踊り
（長浜市余呉町、1986 年 8 月、渡辺撮影）
奴がたんざくを背に太鼓踊りを演じる。豊作祈願の踊り。

⑯竹生島
（長浜市早崎町、2012 年 3 月、藤井撮影）
古くから弁天と観音の聖地として知られる。江戸時代には 9 つの塔頭のある寺院であったが、明治時代以降は宝厳寺と都久夫須麻神社となった。

⑯宝厳寺の納経所
（長浜市早崎町、2003 年 5 月、藤井撮影）
宝厳寺は西国三十三所観音霊場の 32 番札所となっている。

⑰船
（長浜市早崎町、2012 年 3 月、藤井撮影）
竹生島には長浜・今津などから観光船が出ている。

⑱伊吹山
（2007 年 1 月、藤井撮影）
竹生島から伊吹山を望む。

⑨菅浦の集落
（長浜市西浅井町菅浦、2018 年 5 月、藤井撮影）
中世には惣と呼ばれる自治組織を形成していた。1200 点あまりの「菅浦文書」によって惣の実態が明らかになってきている。昭和初期の生業としては、漁業・林業・養蚕・農業などが組み合わせておこなわれていた。周囲の集落とは隔絶されており、平地が少ないため、琵琶湖や山での仕事が中心であった。「菅浦の湖岸集落景観」は平成 26 年（2014）に重要文化的景観に選定された。

⑩西側の四足門
（長浜市西浅井町菅浦、2018 年 5 月、藤井撮影）
菅浦には集落の西側と東側に四足門と呼ばれる門が残されている。

⑪須賀神社
（長浜市西浅井町菅浦、1995 年 3 月、藤井撮影）
この地に隠れ住んでいたと伝わる淳仁天皇を祀る。手水舎より先は裸足で参拝するしきたりになっている。

⑫民家
（長浜市西浅井町大浦、2012 年 3 月、藤井撮影）
明治 10 年（1877）ごろに建てられた民家。屋根は茅葺であったが、昭和 40 年代に葺き替えられた。

⑬花笠踊り
（長浜市西浅井町、1986 年 8 月、渡辺撮影）
古くから京都と北陸をつなぐ街道の要所として栄えたので、平安時代の優雅な踊りが伝承されている。毎年 8 月 16 日雨乞い踊りとして、下塩神社に奉納されている。

⑭西浜の集落
（高島市西浜、2018 年 4 月、藤井撮影）
江戸時代には漁村であり、北国からの物資が通過する湊もあった。湖岸には波除のため、江戸時代に作られた石垣が残っている。平成 20 年（2008）には「高島市海津・西浜・知内の水辺景観」は重要文化的景観に選定された。

⑮知内川
（高島市西浜、2018 年 4 月、藤井撮影）
知内川では江戸時代に西浜の人々によって鵜飼がおこなわれていた。

⑯アユ漁の築
（高島市西浜、2018 年 4 月、藤井撮影）

⑰川上祭
（高島市今津町平ヶ崎、1982 年 4 月、渡辺撮影）
4 月 18 日に行われる酒波の日置神社、北仰の津野神社両社の春祭り。さんやれ祭とも呼ばれる。旧川上庄域の氏子が参加する。祭り当日は、それぞれの地区や神社で出立ちの行事がおこなわれる。その後、午後 1 時ごろに平ヶ崎の馬場と呼ばれる祭礼場に、踊り子・大のぼり・小のぼり（サンヤレ）・神輿が集まり、ぞれぞれの巡行や流鏑馬などがおこなわれる。

⑱保坂の道標
（高島市今津町保坂、1995 年 3 月、藤井撮影）
小浜と今津を結ぶ九里半街道と京都から朽木を経て若狭へ向かう街道（通称、鯖街道）の接点に当たる。江戸時代には、丹後の松尾寺（29 番札所）から竹生島（30 番札所）を目指す西国三十三か所の巡礼者も多く通過した。

⑲鯖街道
（高島市朽木、2015 年 5 月、藤井撮影）
鯖街道は朽木を通り京都へ向かう。写真は興聖寺の門前から京都方面を望む。

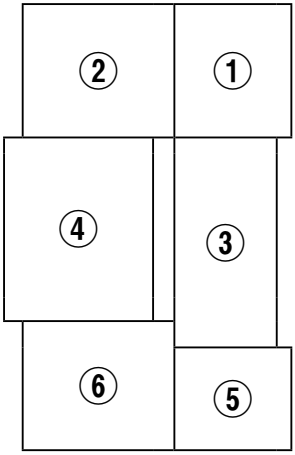
⑳針江の神社
（高島市新旭町針江、2015 年 5 月、藤井撮影）

⑫①針江のカバタ
（高島市新旭町針江、2015 年 5 月、藤井撮影）
　針江・霜降集落を源流とする湧水は、かつては河川流域の水田を灌漑しながら下流の内湖に流入し、琵琶湖へと流出していた。人々の生活と深くかかわりながら、人の手の加わった二次的な自然空間として維持されてきた水辺景観であるとして、平成 22 年（2010）に「高島市針江・霜降の水辺景観」は重要文化的景観に選定された。

⑫②針江のカバタ
（高島市新旭町針江、2015 年 5 月、藤井撮影）
　針江では安曇川の伏流水と比良山系から流れる水が各所から自噴しており、これを飲料水・生活水として利用するために、カバタと呼ばれる洗い場・水場が作られてきた。カバタでは湧水が飲料水用のモトイケ（元池）→洗い物用のツボイケ（壺池）→魚が残飯などを食べて水を浄化するハタイケ（端池）の順に 3 つの槽を流れていき、最終的に水路へと流れ出るしくみになっている。現在でも カバタは日常的に使われている。テレビなどで取り上げられて有名になり、集落内に観光客が大勢押し寄せるようになったため、現在では地元の人々が針江生水の郷委員会を作り、観光客を制限しながら案内している。

⑫③白髭神社
（高島市鵜川、1995 年 3 月、藤井撮影）
　湖中に朱塗りの鳥居が立ち、国道 161 号線を挟んで社殿がある。年老いた漁師の姿で白髭明神が現れる謡曲「白髭」の舞台。数え年 2 歳の子に名前を授け、その子の無事成育を祈る「なるこ参り」の神事がある。

⑫④鵜川四十八体仏
（高島市鵜川、1995 年 7 月、藤井撮影）
　天文 22 年（1553）に観音寺城主の六角義賢が亡き母の追善のために造ったと伝わる。石仏はいずれも阿弥陀如来坐像である。



表紙

①山王祭

（大津市唐崎、1973 年、渡辺撮影）

②三上山

（栗東市、2008 年 5 月、藤井撮影）

③山の神祭り

（甲賀市土山町、1975 年 1 月 7 日、渡辺撮影）

④水路で魚捕りをする子どもたち

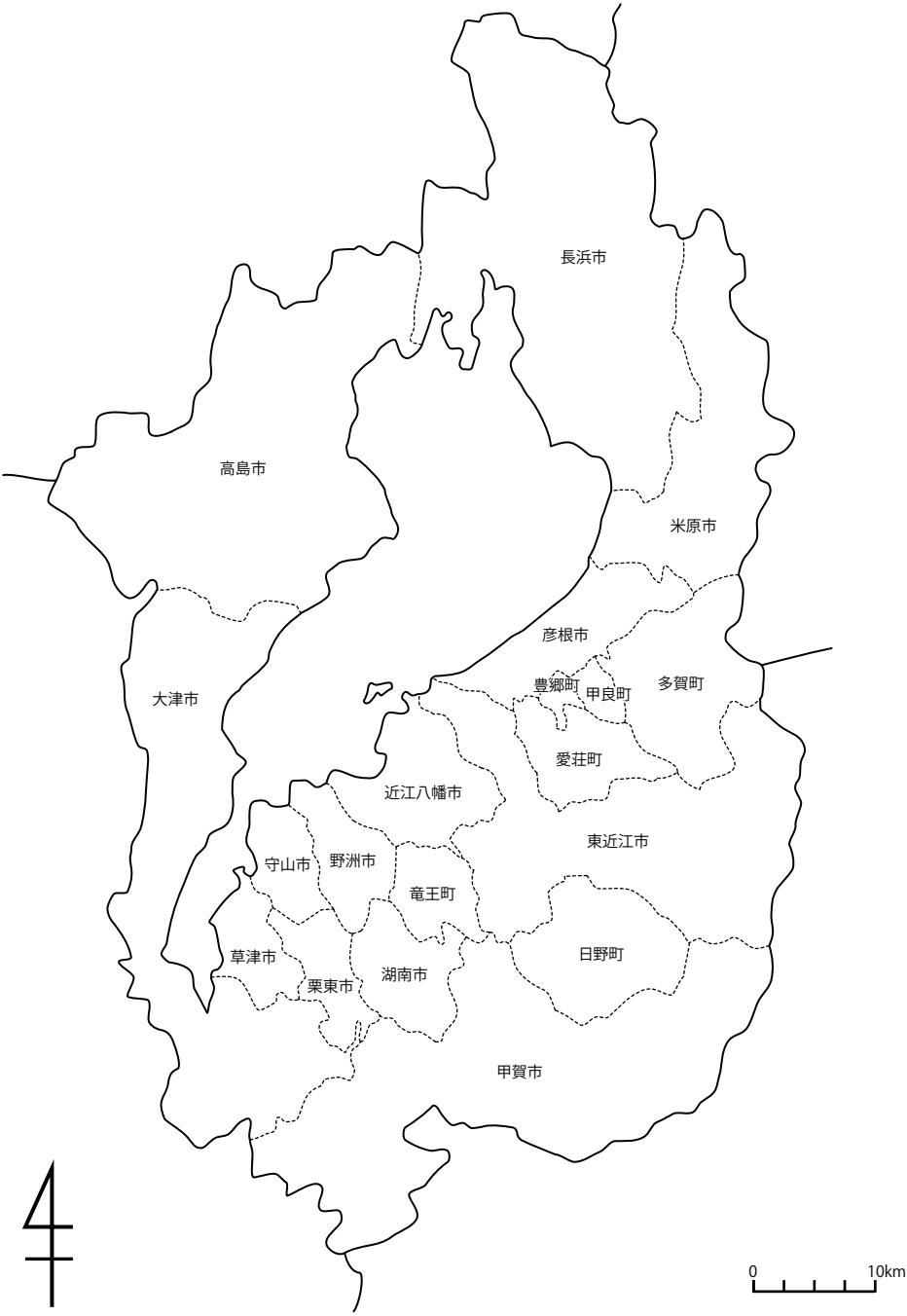
（長浜市高月町、2005 年 8 月、藤井撮影）

⑤針江のカバタ

（高島市新旭町針江、2015 年 5 月、藤井撮影）

⑥白髭神社

（高島市鵜川、1995 年 3 月、藤井撮影）


長浜市
高島市
米原市
彦根市
大津市
豊郷町
甲良町
多賀町
愛荘町
近江八幡市
東近江市
守山市
野洲市
竜王町
草津市
栗東市
湖南市
日野町
甲賀市
0
10km

4

民俗文化

第三十号

表紙・口絵写真　滋賀県の民俗……　網伸也・藤井弘章・鈴木伸二・渡辺良正

目　次

滋賀県の民俗

近江小幡人形小考　……　網伸也　1
竹生島における山林資源の利用と保全
—社寺林の歴史民俗学的考察—　……　藤井弘章・亀田佳代子・牧野厚史・前迫ゆり　33
中世の開発フロンティア・葛川の民族誌　……　鈴木伸二　73
阿弥陀寺の二十五菩薩面と近江湖南の迎講　……　松岡久美子　145
琵琶湖における風伝承　—風と漁撈の関わりを中心に—　……　青柳智之　193
竹生島と周辺地域のかかわり　—祭祀を中心に—　……　藤井弘章　317

滋賀県長浜市早崎町の民俗 ……
藤井弘章・石橋和晃・今岡大樹
大森悠・澤江貴之・辰巳今日子
縄稚慎太郎・前田亜由・松永夏希
峰達夫 335

滋賀県米原市醒井の湧水と暮らし ―醒井七湧水を中心に― ……
廣部あすか 393

書評と紹介

畑中章宏著『天災と日本人―地震・洪水・噴火の民俗学』 ……
辻貴志 413

付録

民俗学研究所第二九回公開講演会
妖怪と俗信（講演要旨） ……
常光徹 419

河内平野における初期方形周溝墓群とその構造
―東大阪市近大山賀遺跡第5次発掘調査の再整理・報告編― …
相馬勇介・矢野昌史
荒田敬介・山本亮
星野安治・高椋浩史
藤田義成・網伸也 486(1)

執筆者紹介 ……
487

投稿規程 ……
493

滋賀県の民俗

執筆者紹介

―生年・出身地・現職・著作―

網伸也（あみ　のぶや）一九六三年、大阪府生まれ。近畿大学文芸学部教授、同大学民俗学研究所所長。『平安京造営と古代律令国家』（塙書房、二〇一一年）、『経塚考古学論攷』（共著、岩田書院、二〇一一年）、『仁明朝史の研究　―承和転換期とその周辺―』（共著、思文閣出版、二〇一一年）、など。

藤井弘章（ふじい　ひろあき）一九六九年、和歌山市生まれ。近畿大学文芸学部教授、同大学民俗学研究所所員。「カワウとつきあう民俗技術　―愛知県美浜町上野間・鵜の山の歴史民俗学的考察」（『村落社会研究』四六、二〇一〇年）、『高野町史　民俗編』（共著、高野町、二〇一二年）、「日本列島のウミガメ供養習俗」（『動物考古学』三一、二〇一四年）、「高野山納骨習俗の地域差　―和歌山県北部を中心に―」（『民俗文化』二九、二〇一七年）、など。

鈴木伸二（すずき　しんじ）一九六八年、大阪府生まれ。近畿大学総合社会学部准教授、同大学民俗学研究所所員。「土地利用制度とガバナンス　―ベトナム・カマウ省のマングローブ湿地の事例から―」（『近畿大学総合文化研究科紀要　混沌』一二、二〇一五年）、「マングローブ湿地のシンプリフィケーション」（『近畿大学総合社会学部紀要』四―一、二〇一五年）、『生態資源―モノ・場・ヒトを生かす世界』（共著、昭和堂、二〇一八年）など。

亀田佳代子（かめだ　かよこ）一九六六年、神奈川県生まれ。滋賀県立琵琶湖博物館総括学芸員。Pattern of natural ^{15}N abundance in lakeside forest ecosystem affected by cormorant-derived nitrogen（共著論文、Hydrobiologia 567（1）、2006年）、「陸上生態系と水域生態系をつなぐもの　―海鳥類の物質輸送と人間とのかかわり―」（山岸哲監修『保全鳥類学』京都大学学術出版会、二〇〇七年）、「生態系間を移動する動物による物質輸送」（永田俊・宮島利宏編『流域環境評価と安定同位体　―水循環から生態系まで』京都大学学術出版会、二〇〇八年）、Nutrient Dynamics and Nutrient Cycling by Birds（共著、Sekercioglu, Ç. H., Wenny, D. G., and Whelan, C. J.（eds）"Why Birds Matter: Avian Ecological Function and Ecosystem Services"、The University of Chicago Press、2016年）、など。

牧野厚史（まきの　あつし）一九六一年、兵庫県生まれ。熊本大学教授。「農山村の鳥獣被害に対する文化論的分析　―村落研究からの提言―」（『村落社会研究』四六、農山漁村文化協会、二〇一〇年）、「動植物にとっての近代社会」（鳥越皓之編『環境の日本史　五　自然利用と破壊　―近現代と民俗―』吉川弘文館、二〇一三年）、など。

前迫ゆり（まえさこ　ゆり）一九五四年、京都市生まれ。大阪産業大学大学院人間環境学研究科教授。Spatial distribution of two invasive alien species（共著論文、Podocarpus nagi and Sapium sebiferum, spreading in a warm-temperate evergreen forest of the Kasugayama Forest Reserve、Vegetation Science24、2007年）、『世界遺産春日山原始林―照葉樹林とシカをめぐる生態と文化』（編著、ナカニシヤ出版、二〇一三年）、『シカの脅威と森の未来 シカ柵による植生保全の有効 性と限界』（編著、文一総合出版、二〇一五年）、「森と里の生態学―地域の生物多様性を育む」（大阪産業大学環境理工学科編『環境サイエンス入門―人と自然の持続可能な関係を考える』学術研究出版、

二〇一七年)、など。

松岡久美子(まつおか　くみこ)一九七五年、岡山県生まれ。近畿大学文芸学部准教授。「善水寺蔵　木造四天王立像」(『国華』第一一八巻六号、二〇一三年)、「ボストン美術館蔵　木造弥勒菩薩立像をめぐる諸問題」(『美術史における転換期の諸相』平成二三年度～平成二六年度科学研究費補助金基礎研究(B)研究成果報告書、二〇一五年)、「近江における黄檗末寺の増加とその背景：祐堂元蔭の萬年寺再興を中心に」(『黄檗文化』一三六号、二〇一六年)、など。

青柳智之(あおやぎ　ともゆき)一九七一年、埼玉県生まれ。日本民俗学会会員。「琵琶湖の風の民俗」(琵琶湖地域環境教育研究会編『琵琶湖博物館研究調査報告』一四、一九九九年)、『雷の民俗』(大河書房、二〇〇七年)、など。

石橋和晃(いしばし　かずあき)近畿大学総合文化研究科修了生。

今岡大樹(いまおか　だいき)近畿大学文芸学部文化学科卒業生。

大森悠(おおもり　はるか)近畿大学文芸学部文化学科卒業生。

澤江貴之(さわえ　たかゆき)近畿大学文芸学部文化学科卒業生。

辰巳今日子(たつみ　きょうこ)近畿大学文芸学部文化学科卒業生。

縄稚慎太郎(なわち　しんたろう)近畿大学文芸学部文化学科卒業生。

前田亜由（まえだ　あゆ）近畿大学文芸学部文化学科卒業生。

松永夏希（まつなが　なつき）近畿大学文芸学部文化学科卒業生。

峰達夫（みね　たつお）近畿大学文芸学部文化学科卒業生。

廣部あすか（ひろべ　あすか）一九九四年、滋賀県生まれ。滋賀大学大学院教育学研究科修士課程。

相馬勇介（そうま　ゆうすけ）一九九六年、大阪府生まれ。堺市文化観光局文化部文化財課学芸員。近畿大学文芸学部文化・歴史学科卒業生。

矢野昌史（やの　まさし）一九九四年、大阪府生まれ。近畿大学大学院総合文化研究科修士課程。

荒田敬介（あらた　けいすけ）一九八五年、岩手県生まれ。神戸市教育委員会文化財課学芸員。「弥生墓から出土した鋒の性格　―嵌入・副葬・供献―」（『考古学雑誌』第九五巻第三号、二〇一一年）、「弥生時代の武力衝突研究史」（『文化財論叢Ⅳ』奈良文化財研究所創立六〇周年記念論文集・奈良文化財研究所学報第九二冊、二〇一二年）、など。

山本亮（やまもと　りょう）一九八七年、高知県生まれ。独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館研究員。『糞置荘・二上遺跡の調査研究』（共著、公益財団法人古代学協会、二〇一五年）、など。

星野安治（ほしの　やすはる）一九七六年、千葉県生まれ。独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所主任研究員。「東日本におけるブナ年輪幅暦年変動パターンの広域ネットワーク構築」（共著論文、『考古学と自然科学』五四、二〇〇六年）、「木の年輪で作った年代を測るものさし　―年輪年代学の成果―」（『遺跡

の年代を測るものさしと奈文研』クバプロ、二〇一五年)、「年輪年代学的手法による木簡研究の可能性」(共著論文、『木簡研究』四〇、二〇一八年)など。

高椋浩史(たかむく　ひろふみ)一九八三年、福岡県生まれ。土井ケ浜遺跡・人類学ミュージアム学芸員。「骨産道形態の時代変化—頭型の時代変化との関連性の検討—」(『Anthropological Science (Japanese Series)』119 (2)、2011年)、「山東北阡遺跡出土之大汶口時期人骨」(共著論文、『東方考古』一〇、二〇一三年)、「古人骨から探る女性骨盤の時代変遷」(『分娩と麻酔』九七、二〇一五年)、『考古学は科学か　田中良之先生追悼論文集』上巻(共著、中国書店、二〇一六年)、など。

藤田義成(ふじた　よしなり)一九五九年、鹿児島県生まれ。近畿大学文芸学部事務部(民俗学研究所)職員。『東広島ニュータウン遺跡群新住西一・四地点遺跡調査報告書』(共著、一九九二年)、『小若江遺跡第次発掘調査報告書』(共著、二〇一〇年)、など。

辻貴志(つじ　たかし)一九七三年、大阪府生まれ。近畿大学経営学部非常勤講師、佐賀大学大学院農学研究科特定研究員。「フィリピン・パラワン島南部の焼畑漁撈民パラワンの鳥の狩猟罠」(野田研一・奥野克巳編『鳥と人間をめぐる思考—環境文学と人類学の対話』勉誠出版、二〇一六年)、「フィリピンにおけるスイギュウの乳利用に関する調査報告—ルソン島中部のスイギュウ研究所の取り組み」(『ビオストーリー』第二七号、二〇一七年)、「フィリピン・ラグナ州におけるスイギュウの乳利用—乳加工と行商の事例」(『佐賀大学農学部彙報』第一〇三号、二〇一八年)、など。

常光徹（つねみつ　とおる）一九四八年、高知県生まれ。国立歴史民俗博物館名誉教授、総合研究大学院大学名誉教授。『学校の怪談―口承文芸の展開と諸相』（ミネルヴァ書房、一九九三年）、『妖怪の通り道―俗信の想像力』（吉川弘文館、二〇一三年）、『しぐさの民俗学』（角川ソフィア文庫、二〇一六年）、『折々の民俗学』（河出書房新社、二〇一六年）、など。

渡辺良正（わたなべ　よしまさ）一九三三年、福岡県生まれ。民俗写真家。『沖縄先島の世界』（木耳社、一九七二年）、『日本の祭り　山車と屋台』（サンケイ新聞社、一九八〇年）、『椎葉神楽』（平河出版社、一九九六年）、など。

民俗文化　投稿規程

（平成三十年七月）

一、投稿できる者は、近畿大学民俗学研究所々員および同所員より推薦を受けた者とする。

二、受け付けた原稿は複数の査読者による査読を受ける。その結果にもとづき、掲載の可否を決定する。論部の内容に不備がある場合には、編集委員から投稿者に修正を求める。

三、刷り上がりは、A五判・縦書き、一ページあたり五十一字×十九行を原則とする。原稿執筆にあたっては、できる限り、刷り上がりに合わせて字数設定を行うものとする。

四、投稿の締切日は、毎年二月末日とする。原稿は、原則として、電子記憶媒体（CD等）を添えて編集委員に提出する。

五、別刷は五十部を無料とする。

六、刊行後の報文（論文、研究ノート、書評、写真及び写真解説等）は、その著作権が近畿大学民俗学研究所に帰属する。ただし、著作者本人による転載等をさまたげるものではない。

七、刊行後の報文（論文、研究ノート、書評、写真及び写真解説等）は、冊子体以外の媒体（近畿大学学術情報リポジトリ等）で公開されることを承諾のうえ投稿すること。ただし、電子媒体での公開に際しては、著作者本人もしくは話者の意向等により、一部または全部を非公開とすることがある。

近畿大学民俗学研究所

民　俗　文　化　第30号

平成30年10月31日印刷
平成30年10月31日発行

編集・発行者　近畿大学民俗学研究所

〒577-8502
東大阪市小若江3丁目4番1号
電　話　(06) 6721－2332

印　刷　所　近畿大学 管理部 用度課

近畿大学
KINDAI UNIVERSITY